

「言語接触と系統継承：大湖地域から南部アフリカにかけて話されているバンツー諸語と隣接言語の記述研究」2008年度第3回

日時：2009年3月14日（土）午後1時半より午後6時半

場所：AA研セミナー室（301）

発表者・発表題目：

- 1) 稗田乃（AA研所員）「クマム語はクレオールか？」
 - 2) 全員「最終年の研究計画」
-

クマム語はクレオールか？

稗田乃（AA研所員）

1. 序論

言語継承と言語接触とが相反する事象ではないことを議論することが本研究の目的である。言語継承と言語接触により生じる現象の1つである言語交替は、まったく異なる言語現象と考えられているが、実はある意味で共通する言語現象であると主張したい。

1.1. 言語交替

言語が接触するときに生じる現象の1つに言語交替がある。言語交替とは、ある特定の言語社会において、話し手が本来話していた言語を話すのをやめ、別の言語を話すようになることを意味する。言語交替は、地球上のあらゆる場所で起こったと考えられる。しかし、言語社会全体において使用される言語が、ある日突然、別の言語に交替することは、ありえないと考えられる。もしもそのような事態が生じたなら、言語社会を構成する話し手同士のコミュニケーションが成立しない。話し手相互のコミュニケーションを可能にするためには、本来話されていた言語と、それと交替するだろう言語の両方が話される、いわゆるバイリンガルの状態が存在するはずである。つまり、社会全体の言語使用ということに関しては、ある言語が別の言語と交替するとき、失われる言語とそれと交替する両方の言語が1つの社会で話される状態、遷移的な状態が必然的に存在することを仮定しなければならない。遷移的な状態がなく交替が生じることはありえない。

しかし、個人の言語使用に関しては、そのような遷移的な状態を仮定する必要はない。ある言語を話している両親から生まれた子供が両親の言語を話さず別の言語を話してもかまわない。言語継承が行われてもかまわない。このような事態が生じてもコミュニケーションの問題は原理的には生じない。コミュニケーションを可能にするには、両親が本来の言語のほかに子供が話す言語を話すことができればよい。あるいは、両親が話す言語と、子供が話す言語の両方を使用する仲介者が存在すれば、コミュニケーションの問題は解決される。この議論はあくまでも原理的なものであり、実際に生じる事態に基づいた議論で

はない。しかし、強調したい点は、言語社会全体で生じる言語交替の現象と、個人の言語能力で生じる言語交替の現象とを、明確に区別しなければならないことである。

言語交替が生じる時の社会言語学的な現象に目を向けるのではなく、言語交替時における、言語構造において生じる様々な現象に目を向ける場合には、言語社会で生じている現象と個人の言語能力で生じている現象を区別したことが重要になる。言語構造において生じる様々な現象は、個人の言語能力で生じる言語現象のなかでのみ説明することが可能である。

言語交替時において、失われる言語を「放棄される言語」と、失われる言語と交替する言語を「ターゲット言語」と呼ぶ。言語交替は、必ずしも「ターゲット言語」の言語構造をそっくりそのまま新たな言語話者によって獲得されるとは限らない。すなわち、言語交替時に、「ターゲット言語」を子供が獲得するとき、子供が獲得した言語が「ターゲット言語」の構造をそっくりコピーしているとは限らない。そのような事態が生じる原因として、子供が言語を獲得するとき子供は自らが生得的にもつ言語獲得能力を用いて与えられた言語資料から文法を構成する際に、与えられる言語資料が十分でないことが想定できる。なぜなら子供の両親は、「放棄される言語」を話しているか、「ターゲット言語」の十分な知識をもっていないと考えられるからである。したがって、言語交替時において「放棄される言語」を話す両親から子供が「ターゲット言語」を獲得する際に、子供が不十分な「ターゲット言語」の資料から生得的な言語獲得能力を用いて構成する言語は、「ターゲット言語」の構造をそっくりコピーしたものにならない。ちなみに子供が生得的にもつ言語獲得能力は、普遍的に人類に共通するものと考えている。

1.2. 言語継承、言語交替、ピジン・クレオール

子供がある特定の言語の不十分な言語資料から言語獲得能力を用いて文法を構成することは、ピジン・クレオールの生成と共通する事象である。ピジン・クレオールは、子供が言語を獲得するとき1つの特定の言語資料を与えられるのではなく、複数の言語の資料を与えられることから生成されると考えられる。この意味で言語交替時に子供が獲得する言語が「ターゲット言語」の構造を完全にコピーしたものでないことと、ピジン・クレオール語の生成とは共通の基盤が存在する。

さらに言語が継承される場合も子供の言語獲得の過程においても、言語交替時における子供の言語獲得の過程における、また、ピジン・クレオール生成時における子供の言語獲得の過程において生じる事態と同じことが起こっていると考えられる。言語継承時に子供の言語獲得の過程で生じていることと、言語交替時やピジン・クレオール生成時に子供の言語獲得の過程で生じていることとの違いは、言語継承時において子供は十分な言語資料を両親から与えられることだけである。言語継承時において子供は普段に両親から言語使用の間違いを指摘され、訂正される。しかし、子供が与えられた言語資料から生得的な言語獲得能力を用いて言語を構成することに関しては、言語継承時であろうと、言語交替時であろうと、ピジン・クレオール生成時であろうと、同じ過程を子供は行なっていると考

える。したがって、言語継承時であっても、子供が生得的な言語獲得能力を用いて与えられた言語資料から構成する文法は、両親が話す言語の文法とは異なるものなる可能性は常に存在する。いくら十分な言語資料が与えられても、子供は、両親が話す言語の構造を完全にコピーするとは限らない。つまり、これが言語の通時的変化のはじまりといえる。

言語の通時的変化は、子供が生得的な言語獲得能力を用いて与えられた言語資料から文法を構成するときを生じる。子供は常に言語を再構築化すると言える。子供が再構築化した文法が社会のなかでどのように定着するかは言語社会学の領域である。

言語継承時と、言語交替時やピジン・クレオール生成時の間に存在する子供に与えられる言語資料の量の違いは、たんに量的な違いであるか、それとも本質的な違いであるかが将来の研究のテーマとなろう。

本論では言語交替時に生じた文法の再構築化と考えられる事例を提示しよう。ただし、さらなる検討の余地があるものとする。

クマム語が言語交替により成立した言語であるとの仮定のもとに文法の再構築化について議論しよう。

2. クマム語

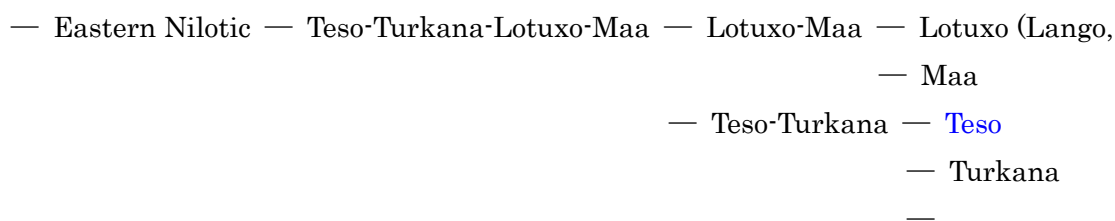
クマム語は、ウガンダ Uganda 中部、カベラマイド(Kaberamaido)郡、ソロティ(Soroti)郡、セレレ(Serere)郡、チョガ(Kyoga)郡で話されている。クマム語の東にはテソ語が、北西にはランゴ語が話されている。話者人口は、112,629 人である (Gordon, 2005: 211)。

クマム語は、ナイル・サハラ言語ファイラムの中のナイル諸語に所属する。クマム語は、ナイル諸語を構成する3つの下位言語群の中の西ナイル諸語に属する。

東に接しているテソ語は、東ナイル諸語に属し、北西に接しているランゴ語は、クマム語と同じ西ナイル諸語に属する。

Nilo-Saharan phylum

— Nilotic — Western Nilotic — Nuer-Dinka — Nuer
— Dinka
— Lwo — Northern Lwo — Shilluk
— Anywa
— Pãri
—
— Southern Lwo — Luo
— Acooli
— Lango
— Kumam
—



— Southern Nilotic

図1 クマム語の分類

クマム語とテソ語は、ともにナイル諸語に所属するとはいえ、系統的にも構造的にも離れており、クマム語とテソ語の間には相互理解性はない。クマム語とランゴ語は、ともに西ナイル諸語に属しており、また、構造的に類似していて、クマム語とランゴ語の間には相互理解性が存在する。

クマム語の起源、ならびに、クマム民族の起源については、いくつかの説がある。たとえば、実際に、言語的な違いにかかわらず、クマム語とテソ語とランゴ語を話す人々は、1つの社会集団を形成していると周囲の民族から見なされており、総称してアテケリン *Atekerin* とよばれる。

クマム民族の起源に関して、1)「クマム語の話し手はおおよそ紀元 1600 年頃、エチオピアから現在彼らが居住する地域へ移動した」との説がある。この説によると、クマム語の話し手は、かつてランゴと呼ばれていた。実際に現在スーダンで話されているロツホ語の地域変種のなかにランゴ方言と呼ばれるものがある。2)「カリモジョン民族がテソ語、ランゴ語、クマム語を話す人々を総称して呼ぶときの名前、クママ *Kumama* とクマムという名前は関連がある」3)「クマムの名前は、ランゴ語を話す人々がテソ語とランゴ語を話す人々を総称するときの名前、アクム *Akum* に由来する」との説がある。

また、4)「クマム語は、3分の2がルオ語で、3分の1がテソ語である」と、クマム語の話し手自らにより、また、クマム語の周辺に住む民族により形容される。実際にクマム語の語彙体系のなかには、東ナイル諸語の言語と共通する語彙が少なからず存在する。

さらに、5)「クマム語を話す人々は、かつて東ナイル諸語に属する言語を話していた。現在の居住地に移動したのちに、彼らは東ナイル諸語に属する言語を話すのをやめ、西ナイル諸語に属する言語に言語交替をおこなった」との説がある。ケラー *Koehler* は、「クマム語をテソ語に起源をもつ言語であると考え、クマム語を話す人々の移動を 18 世紀のことである」と考えている (*Vossen 1982: 66*)。また、ローランス *Lawrance* は、「テソ語を話す人々とクマム語の話す人々が分離したのは 19 世紀の初めである」とする (*Hilders & Lawrance 1957: 15*)。

これらの説を総合的に検討して、暫定的な仮説をたてると、6)「クマム語の話し手が本来話していた言語は不明である。現在話されているクマム語の中に存在するテソ語起源の語彙は、最近の言語接触によるものである」と考えられる。また、8)「クマム語は、言語

接触により成立した言語である」と仮説をたてる。その理由として、クマム語の音韻論的構造と形態統語論的構造は、西ナイル諸語と共通していて、しかもランゴ語のそれとよく似ている。しかし、語彙は西ナイル諸語の言語と似ているのだから、じつは形態統語論的情報を考慮すると西ナイル語祖語に遡ることが困難なことである。

2.1. 最近の借用語

クマム語の中に現在観察される東ナイル諸語と共通する語彙は、最近の言語接触によるテソ語からの借用語であると考えられる。これらの東ナイル諸語と共通する語彙は、クマム語の中にクマム語の話し手が本来話していただろう言語の痕跡ではないと考える。

表1 クマム語の中のテソ語 (1)

A) 語彙借用

クマム語	テソ語 (Apuda Ignatius Loyola, <i>English-Ateso pocket Dictionary</i> , 2007)	
abár	abar	‘wealth’
abólá	aboolai	‘money’ (used by old generation in Kumam)
abé	abeet (pl. abeei)	‘egg’
abélekék	abelekek	‘finger-nail’
abáó	abao	‘board’ (Swahili: bao)
abúkéwân	abukyoit	‘eyelash’
aólá	aola	‘cough’
acér(L)	aacerit	‘star’
acút(L)	acut	‘vulture’
adám	adam	‘brain’
adóné	edonge	‘sterile’

クマム語名詞がテソ語からの借用か否かの簡便な方法として、クマム語名詞が母音、-a, -ε, -i で始まるかを見る方法がある。テソ語名詞は、必ず語頭の位置に接頭辞、-a, -ε, -i (pl.) をもつから、クマム語名詞が-a, -ε, -i をもつか否かで、テソ語からの借用であるか否かを決定する。ただし、クマム語にはもともと存在した母音-a からなる名詞接頭辞が存在するので、クマム語名詞が母音-a で始まるからといって、すぐにその名詞がテソ語からの借用であると決定することはできない。クマム語とテソ語の語彙を対照することにより借用か否かを決定する。

残念なことに、テソ語の信頼にたる記述が未だに存在しない。表1、表2、表3で用いた資料には母音が5つ (テソ語は、5つの[+ATR]母音と5つの[-ATR]母音をもつと考えられるが、資料には[ATR]値が記述されていない) のみ区別されている。また、テソ語は声調言語であるにもかかわらず、声調を記述していない。テソ語とクマム語の対照の作業は、部分的なものに限られる。

表 2 クマム語の中のテソ語 (2)

B)語彙借用

クマム語	テソ語 (high+down-stepped-high in Kumam corresponds to Swahili accent)
maé!mbé	emuebe ‘mango’ (Swahili: maembe)
naná!sí	enanasi ‘pineapple’ (Swahili: nanasi)
ení!mú	enimu ‘lemon’ (Swahili: limau)
epá!mbá	‘cotton’ (Swahili: pamba)
epá!ŋá	‘machete’ (Swahili: panga)
mopí!rá	emopiira ‘tire, ball’ (Swahili: mpira)
egá!lí	egaali ‘bicycle’ (Swahili: gari)
sumá!lí	esumaalit ‘nail’ (Swahili: msumari)

表 2 のクマム語名詞は、スワヒリ語を起源にする借用語と考えられる。ただし、クマム語は、スワヒリ語から直接これらを借用したとは考えられない。クマム語名詞は、上述したテソ語の名詞接頭辞をコピーしている。また、クマム語は、スワヒリ語の蠕動音/r/を側面音/l/と混同するが、その混同する傾向は、テソ語がする混同と一致する（‘bicycle’, ‘nail’の例を参照）。

しかし、表 2 のクマム語名詞は、語末から 2 番目の音節に高声調を、語末の位置にダウンステップ高声調を必ずもつ。これは、スワヒリ語のアクセントの位置を反映していると考えられる。スワヒリ語は、語末から 2 番目の音節に必ずアクセントがおちる。しかし、表 2 のクマム語名詞の声調パターンがスワヒリ語のアクセントを直接コピーしているとは考えない。テソ語の声調パターンをコピーしていると想定するほうが妥当であろう。ただし、これを証明するにはテソ語の声調を調査する必要がある。

表 3 クマム語の中のテソ語 (3)

C)語彙借用

クマム語	英語 (vowels are always [+ATR] in borrowing words in Kumam from English)
agúrin	‘green’
gilási	‘glass’
silípa	‘slipper’
kilás/kilási	‘class’
tóci	‘torch’
bésení	‘basin’
rédio	‘radio’
tívi	‘TV’

video	‘video’	
táun	‘town’	
sɪkát	‘skirt’	(Teso: asikaat)
dɔré!vá	‘driver’	(Teso: ederepa)
etái	‘tie’	(Teso: ?)
esátí	‘shirt’	(Teso: ?)

また、クマム語には近年に英語から入ったと考えられる借用語がある。英語からの借用語は、語を構成する母音が[+ATR]母音であることで特徴づけられる（クマム語は、母音調和の現象を持ち、母音調和の基本的な規則により、語を構成するすべての母音は[+ATR]か[-ATR]に統一される）。表 3 に[-ATR]母音で構成されるため、「英語からの借用語はつねに[+ATR]母音をもつ」という原則から逸脱すると考えられる例が存在する（‘skirt’, ‘driver’, ‘tie’, ‘shirt’を参照）。しかし、これらの例外的な語は、直接英語から借用されたものでなく、いったんテソ語に借用され、テソ語からクマム語に入ったと考えられる。そのことは、‘tie’, ‘shirt’を意味するクマム語名詞がテソ語からの借用であることを示す接頭辞-e をもっていることから分かる。

英語からの借用語がなぜ[+ATR]母音をつねにもつかの問題も興味あるが、ここではこれ以上議論しないことにする。また、‘green’を意味するクマム語の語は、接頭辞-a をもっているが、この接頭辞はテソ語に由来するものではなく、クマム語本来の形容詞に接辞する接頭辞だと考えられる。

3. 西ナイル諸語南ルオ方言諸語にみられる言語接触

3.1. 西ナイル諸語南ルオ方言諸語における時制体系の発展

西ナイル諸語の基本的な時制・アスペクト体系は、時制を形態音韻論的に区別せず、アスペクトのみ形態音韻論的に区別することである。ただし、アスペクトを区別する形態音韻論的手段は、分節的なものではなく、声調によるものである。

表 4 クマム語のアスペクト体系

Imperfect		L H ϕ H L L
(1) a=tédó	cam	\
1SG=IMP:cook:TR	food	a=té dó cam
(2) Perfect		L H L H L L
a=tédo	cám	\
1SG=PERF:cook:TR	food	a=té do cáam

西ナイル諸語は、未完了アスペクトと完了アスペクトを形態音韻論的に区別する。クマム語の完了アスペクトは、人称クリティックと動詞語幹の間に低声調素を挿入することにより表現される（1人称・単数クリティックは、低声調素と高声調素を付与され、これらの低声調素と高声調素に後続する低声調素が完了アスペクトを表現する形態音韻論的標識である）。

クマム語の未完了アスペクトは、人称クリティックと動詞語幹の間になんら声調素が介在しない（クマム語の資料は、筆者が調査により収集したものである）。便宜上、声調素が介在しないことを表すために、記号ϕを人称クリティックがもつ声調素と動詞語幹がもつ声調素の間に挿入する（動詞語幹は、直説法においては必ず高声調素をもち、他動詞語幹形成辞-əは、つねに低声調素をもつ）。

基底の声調素パターンから表層の声調表現を得るためのやり方は、超分節的理論を採用している。

表5 クマム語の時制表現

Past

(3) ϕ=udo a=tédó cam
 3=PERF:observe:TR 1SG=IMP:cook:TR food
 ‘I cooked food.’

(4) ϕ=udo a=tédo cá:m
 3=PERF:observe:TR 1SG=PERF:cook:TR food
 ‘I had cooked food.’

(5) Parataxis

a=néno atɪn ϕ=rɪŋə ɪ-sokólu
 1SG=PERF-see-TR child 3SG=PERF:run:INTR to-school
 ‘I saw the child running to the school.’

Future

(6) a=yáro teedo cam
 1SG=PERF:want:TR cook:INF food
 ‘I will cook food.’

一方、クマム語は、時制を表現するために語彙的な手段を用いている。過去を表現するために、副詞的要素 ϕ=udo が動詞の前におかれる。この副詞的要素は、本来動詞 uudo ‘to observe’ Infinitive から由来する。動詞語幹-udo には、3人称・単数クリティック ϕ=が動詞語

幹に前置し、完了アスペクトの声調素をもっている。また、この副詞的要素は、必ず動詞に前置されなければならない。nɔrɔ ‘yesterday’のような時間を表現する副詞的要素は、文の様々な位置に置かれることが可能であることと、この副詞的要素はまったく性格が異なる。その理由として、この過去を表現する副詞的要素を用いた文は、例文 (5) で示した補文標識をもたない従属文をとまなう文構造に由来すると考えられる。ただし、クマム語の話し手は、この副詞的要素ɔ=udoが動詞uudo ‘to observe’に由来するという意識はまったくない。したがって、これを副詞的要素と名づけておく。

例文 (5) は、主文 a=nɛnɔ ‘I saw’に従属文 atɪn ɔ=rɪŋɔ ɪ-sokólu ‘the child run to school’が埋め込まれた文である。このタイプの従属節にはなんら補文標識をもたない（クマム語には穂分標識 bɛ が存在する）。クマム語の過去を表現する副詞的要素をもつ文は、例文 (5) が示す補文標識をもたない従属節が埋め込まれた文から由来したと考えてよい。

一方、クマム語の未来表現は、不定詞節を埋め込み文としてもつ文に由来する。クマム語において、動詞 yaaro ‘to want’ Infinitive が未来を表現するためには必ず完了アスペクト形式を用いなければならない。例文 (6) は、主文 a=yáro ‘I wanted’に不定詞節 teedo cam ‘to cook food’が埋め込まれた文である。動詞 yaaro ‘to want’の完了アスペクト形式を用いて未来を表現することは、動詞 yaaro ‘to want’の完了アスペクト形式にどんな意味をもった動詞の不定形を後続させることが可能であること、また、動詞 yaaro ‘to want’の完了アスペクト形式の主語にどんな意味をもった名詞を先行させることも可能であることからわかる。つまり、動詞 yaaro の完了アスペクト形式を用いて未来時制を表現するやり方は、動詞 yaaro ‘to want’の本来の意味を失って、未来表現としてクマム語の文法の中に定着していることを示している。クマム語の話し手は、動詞 yaaro の完了アスペクトを用いた未来表現が動詞 yaaro ‘to want’と関係あることは認識している。この点は、過去を表現する副詞的要素ɔ=udoと異なる。したがって、動詞 yaaro ‘to want’を用いた未来表現と名づける。

文法化についての通言語学的知識によれば、様々な言語において、‘to go’, ‘to come’, ‘to want’などを意味する動詞から文法化のプロセスにより、未来時制を表現する形式にいたることはよく知られている。この際にこれらの動詞に後続する従属節は、不定詞節になることが知られている。クマム語の未来時制表現は、通言語学的な観点から、言語普遍的な文法化プロセスにのっとり、発展したものと考える。

3.2. ルオ語の時制・アスペクト体系

クマム語の資料をもちいて西ナイル諸語の時制・アスペクト体系について観察した。クマム語と同じ南ルオ方言諸語に所属するルオ語は、クマム語よりも豊かな時制を表現する体系をもっている。アスペクト体系は、クマム語をおなじく、未完了アスペクトと完了アスペクトをただ声調のみを使って区別する。例 (7) は、未完了アスペクトを、例 (8) は、完了アスペクトを示している。ルオ語の声調体系については未だに十分に解明されていないが、クマム語の例 (1) と例 (2) から類推して、ルオ語の完了アスペクトも低声調素により未完了アスペクトから区別されると考えられる。

表 6 ルオ語のアスペクト体系

(7) Imperfect

ji lówó rɛˈc
 people IMP:catch:TR fish

(8) Perfect

ji ɔ-lɔwɔ rɛˈc
 people 3SG-PERF:catch:TR fish
 ‘People caught fish.’

表 7 ルオ語の時制表現

General Past (ADV: á·yɛ)

(9) áyɛ ji ɔ-lɔwɔ rɛˈc
 Then people 3SG-PERF:catch:TR fish
 (10) áa ji ɔ-lɔwɔ rɛˈc
 (11) ji â-ɔ-lɔwɔ rɛˈc

Recent Past (ADV: né·nde)

(12) nénde ji ɔ-lɔwɔ rɛˈc
 (13) née ji ɔ-lɔwɔ rɛˈc
 (14) ji né=ɔ-lɔwɔ rɛˈc
 (15) ji nɔ́-ɔ-lɔwɔ rɛˈc

Remote Past (ADV: né·né)

(16) néné ji ɔ-lɔwɔ rɛˈc
 (17) néeé ji ɔ-lɔwɔ rɛˈc
 (18) ji né=ɔ́-lɔwɔ rɛˈc
 (19) ji nɔ́-nɔ́-lɔwɔ rɛˈc

Yesterday Past (ADV: ɲóro)

(20) ɲóro ji ɔ-lɔwɔ rɛˈc
 (21) ɲóo ji ɔ-lɔwɔ rɛˈc
 (22) ji ɲó-ɔ-lɔwɔ rɛˈc

Past of ‘the day before yesterday’ (ADV: ɲó·ca)

(23) ᵐóca ji ɔ-lɔwɔ réˈc

(24) ji ᵐóc(o)=ɔ-lɔwɔ réˈc

Past of ‘a few days ago’ (ADV: yá`nde)

(25) yandé ji ɔ-lɔwɔ réˈc

(26) ji yand(é)=ɔ-lɔwɔ réˈc

Future

(27) á-biro ndíkɔ barúˈwa

1SG-IMP:come to write letter

‘I am going to write a letter.’

(28) wá-dhɪ níédho

1PL-IMP:go to milk

‘We are going to milk (action will take place elsewhere)’

(29) ɔt dwá(rɔ) podho píɲ

House 3SG:IMP:want to fall down

‘The house is about to fall down.’

(29) jotíc nɔ-ní ndí (<ní+ɔ)

worker will:3SG-sleep:SUBJ

‘The worker will sleep.’

ルオ語は、過去の表現に **General Past**, **Recent Past**, **Remote Past**, **Yesterday Past**, **Past of ‘the day before yesterday’**, **Past of ‘a few days ago’** という 6 つの表現をもつ。それぞれの時制表現は、少なくとも 2 つ以上の自由変種からなる。例えば、**General Past** は、3 つの自由変種をもち、**Recent Past** は、4 つの変種をもつ。**Past of ‘a few days ago’** は、少なくとも 2 つの変種をもつ。

自由変種の例 (12)、(16)、(20)、(23)、(25) では、時間を表現する副詞が形式を変えることなく、動詞の前に前置される。例 (13)、(17)、(21) は、時間を表現する副詞がその形式が縮小しているだけであり、動詞の前に前置されていることは、例 (12)、(16)、(20)、(23)、(25) と変わらない。例 (14)、(18)、(24)、(26) は、時間を表現する副詞から由来するクリティックが動詞に前置される。ただし、クリティックは、主語と照応する接頭辞の前に先行する。また、主語は、クリティックの前に置かれている。例 (16)、(19)、(22) は、時間を表現する副詞から由来する接頭辞が動詞に前置される (クリティックと接辞の違いは、接辞が母音調和に従うのに対して、クリティックは、母音調和を行わない)。ただ

し、時間を表現する接頭辞は、主語と照応する接頭辞の前に先行する。また、主語は、時間を表現する接頭辞の前に置かれる。これら 1 群の時間表現の変種は、時間を表現する副詞がクリティックへ、さらに、接頭辞へと文法化するプロセスを示している。

未来を表現するために、3つの不定詞節を埋め込み文として用いるやり方と、1つの接続法をもつ従属文を埋め込み文として用いるやり方を、ルオ語はもっている。不定詞節を埋め込み文としてもつ未来表現には、‘to come’, ‘to go’, ‘to want’を意味する動詞が用いられる。‘to come’を意味する動詞を用いた未来表現と、‘to go’を意味する動詞を用いた他未来表現は、若干の意味の違いが存在する（例 (27) と (28) を参照）。不定詞節を埋め込み文として用いて未来を表現するやり方は、クマム語と共通するが、西ナイル祖語に遡るものとするより、むしろ、通言語学的に普遍的な時制表現の発展と考えるべきであろう。実際に次に見るアチョリ語では、未来表現はクマム語やルオ語と異なる発展を示している。

3.3. アチョリ語の時制・アスペクト体系

アチョリ語のアスペクト体系は、上で述べたクマム語のアスペクト体系、ルオ語のアスペクト体系と同じと考えられるので、ここで再び取り上げることはしない。

表 8 アチョリ語の時制表現

Past

(30) ò-nòŋo	gɪ̀-ryèm-è	wóko
3SG-PERF:find:TR	3PL-PERF:drive-3SG	away
‘He had been driven away.’		

Future

(31) ì-bí-nèen-è	páaco	(bí inó ‘to come’)
2SG-FUT-see-3SG	at home	
‘You will see him at home.’		

アチョリ語の過去表現は、クマム語をよく似ている。動詞 *nooŋo* ‘to find’ Infinitive に 3 人称単数の接頭辞を接辞させた主文に、補文標識をもたない従属節が埋め込まれた文により過去を表現する。ただし、過去を表現するために主文に用いる動詞は、クマム語において過去を表現するために主文に用いられる動詞と *cognate* ではない。

アチョリ語の未来表現は、‘to come’を意味する動詞から由来する時制を表現する接頭辞 *-bɪ* が用いられる。しかも、主語と照応する接頭辞と未来を表現する接頭辞の相対的な位置がルオ語のそれと異なっている。ルオ語においては、過去の時間を表現する接頭辞は、あくまでも主語と照応する接頭辞の前に前置されていた。アチョリ語の未来を表現する接頭辞は、主語と照応する接頭辞の後ろに後置される。この原因は、ルオ語の過去を表現する接辞が時間を表現する副詞から由来するのに対して、アチョリ語の未来を表現する接辞は、

主文の動詞を由来とすることによる。実際、アチョリ語において未来時制の接頭辞に後続する動詞語幹は、不定詞形をしていると考えられる。したがって、アチョリ語の未来表現は、‘to come’を意味する動詞からなる主文に不定詞節が埋め込まれた構造に由来すると考えられる。

ナイル諸語が区別する時制の数と、ナイル諸語の近隣で話されているバントゥ語における時制の数を簡単に較べてみる。

ルオ語やカレンジン諸語（東ナイル諸語）のように、バントゥ諸語と密接な言語接触を行なっている言語において時制表現の数が多くなっている。ただし、表 10 のグシイ語の時制形態論の例から分かるように、時制を表現する接頭辞と主語と照応する接頭辞の相対的な位置は、ナイル諸語とバントゥ諸語とでは基本的に異なっている。この 2 つの事実から考えることは、ナイル諸語の時制表現の発達は、近隣で話されているバントゥ諸語との言語接触の影響を考えることなしには説明できないけれど、ナイル諸語がバントゥ諸語の時制を表現する形態論をそのままコピーしたのではないことである。

アチョリ語の未来時制を表現する接辞と主語と照応する接頭辞の相対的位置がバントゥ諸語における時制を表現する接辞と主語を照応する接辞との相対的位置と同じになっているのは、アチョリ語の未来を表現する接辞が主文の動詞から由来すること、未来表現が不定詞節を埋め込み文としてもつ文から由来すること、バントゥ諸語の時制接頭辞が主文の動詞から由来することという文法化に関する共通する起源をもつことによると考えられる。すなわち、アチョリ語の未来時制接辞がバントゥ諸語との言語接触を原因とする発展と考えることは妥当ではない。

表 9 ナイル諸語とバントゥ諸語における時制の数

	Past	Future
Kumam	1	1
Acooli	1	1
Luo	6	3
Kalenjin	3	3
Bantu	(ただし、複合時制をくわえるともっと多い)	
Kuria	2	3
Gusii	4	1
Nkore	3	2
Swahili	1	1

表 10 グシイ語（バントゥ語）の時制形態論

Gusii

Past

(32) \acute{n} - $\acute{n}\acute{a}$ - $\acute{r}\acute{u}\acute{g}$ - \acute{a} ‘I cooked (yesterday)’

(33) $n\text{□}$ - $\acute{n}\acute{a}$ - $\acute{r}\acute{u}\acute{g}$ - \acute{a} ‘I cooked (before yesterday, but usually more than a week ago)’

(34) \acute{n} - $\acute{n}\acute{a}$ - $\acute{r}\acute{u}\acute{g}$ - $\acute{e}\acute{t}\acute{e}$ ‘I cooked (earlier today)’

(35) \acute{n} - $\acute{n}\acute{a}$ - $\acute{r}\acute{u}\acute{g}$ - $\acute{e}\acute{t}\acute{e}$ ‘I cooked (some time ago)’

Swahili

Future

(36) ni - ta - $pika$ $chakula$ ‘I will cook food.’ ($ta < taka$ ‘to want’)

(37) ni - na - $enda$ ku - $pika$ $chakula$ ‘I am going to cook food.’

表 11 ナイル諸語の時制を表示する形態論

	Past	Future
Kumam	SC-PERF-Verb SC=IMP/PERF:Verb	SC=PERF-AUX INF
Acooli	SP-PERF-Verb SP-IMP/PERF:Verb	SP-TENS-V
Luo	ADV SP-IMP/PERF-Verb TENS=SP-IMP/PERF-Verb TENSP-SP-IMP/PERF-Verb	SP-IMP-AUX INF TENS-SP-Verb(subjunctive)
Kalenjin	TENSP-SP-Verb	ADV SP-Verb
Bantu	SP-TENSP-Verb	SP-TENSP-Verb SP-TENSP-AUX INF

これまでのまとめとして以下の疑問について議論しておこう。

(1) 南ルオ諸語の時制表現の発展はバントゥ諸語との接触によるものか？

南ルオ諸語の時制表現は、近隣で話されているバントゥ諸語との接触に触発されて発展したと考えられる。ただし、南ルオ諸語がバントゥ諸語の時制の形態論をそっくりコピーしたのではない。

南ルオ諸語の時制表現の発展は、通言語学的に普遍的な文法化プロセスにのっとなって行なわれた。そのことは、ルオ語における過去の表現が、時間を表現する副詞から発展したクリティックや接辞と主語と照応する接辞との相対的位置がバントゥ諸語のそれとは異なること、クマム語とアチョリ語における文の主節の動詞から発展した過去の表現はバントゥ諸語にみられないことから分かる。

一方、アチョリ語の未来時制の接辞と主語と照応する接辞との相対的位置がバントゥ諸語のそれと共通するのは、アチョリ語の未来時制の表現もバントゥ諸語の時制表現も不定詞節を埋め込み文とする構造から由来することによる。これは南ルオ方言諸語において時制表現が独自に発展を遂げたことの反証とはならない。通言語学的に共通する文法化のプ

- man 3SG-PERF:see child
 ‘The man saw the child.’
- (42) dákô bínô nénô AN
 woman 3SG-HAB:come to see
 ‘The woman will see.’
- (43) àtɪ □nn ànên SA
 child 3SG-PROG:be visible
 ‘The child is visible.’

表 13 ランゴ語、TR と AN と SA

TR	AN	SA
nènnò ‘to see’	nénô ‘to see’	nên ‘to be visible’
òllò ‘to cause to cough’		ólo□ ‘to cough’
mèèrò ‘to intoxicate’		mèr ‘to get drunk’
wàllò ‘to boil’		wálô ‘to boil, become angry’
ɲàmmò ‘to chew’	ɲámô ‘to chew’	
tùkkò ‘to play’	tùkò ‘to play’	
rìŋŋò ‘to run from’	rìŋò ‘to run’	
càmmò ‘to eat’	cèm ‘to eat’	
ròm̄m̄ò ‘to be sufficient for’	róm̄ ‘to be sufficient for’	

[Infinitive Formation in Lango: CVC-nɔ → CVCCɔ (If C=r or y, CVVr/y-ɔ)]

一方、クマム語は、他動詞形と自動詞形と自動詞用法形のほかに中動相形が存在する。ランゴ語にも中動相形は存在するが、クマム語ほどランゴ語において中動相形は動詞統語論のなかで果たす機能は大きくない。逆にクマム語においては自動詞形と自動詞用法形の出現頻度は多くない。

クマム語における他動詞形と自動詞形と自動詞用法形についての定義は、ランゴ語のそれと同じであるのでここで繰り返さない。中動相形は、他動詞語幹から生産的に接尾辞-εεを付加することによりつくられる（詳細な規則については省略）。

中動相形は、自動詞文に用いられる。つまり目的語をもたない。中動相形は、対応する他動詞文の目的語が中動相形の主語になる場合を MID1 と呼ぶ。対応する他動詞文の主語が中動相形の主語になる場合、その中動相形を MID2 と呼ぶ。文法関係に関して、他動詞形と MID1 の関係は、他動詞形と SA の関係と同じであり、他動詞形と MID2 関係は、他動詞形と AN の関係と同じである。

クマム語の動詞は、TR, MID1, MID2, AN, SA のどの形式をもつかを基準にして表 15 のよう

(51) a=ɲwal AN
 1SG=PERF:give a birth
 ‘I gave a birth.’

表 15 クマム語、TR,MID1,MID2,AN,SA

TR	MID1	MID2
uudo ‘to find’	ud-ere ‘to be found’	
yaaabo ‘to open’	yab-ere ‘to be opened’	
mɔɔɔɔ ‘to greet’		mɔt-εεε ‘to greet each other’
maaro ‘to like’		mar-ere ‘to like each other’
wɪɪɪɪɔ ‘to hear’	wɪɪɪ-εεε ‘to be heard’	wɪɪɪ-εεε ‘to agree with’
lwoko ‘to wash’	lwok-ere ‘to be washed’	lwok-ere ‘to wash oneself’

TR	SA	AN
yεεεɔ ‘to satisfy’	yεɪ ‘to be satisfied with’	
ɲwεɔ ‘to smell’	ɲε ‘to smell’	
ɲwalo ‘to bear’		ɲwal ‘to give a birth’
pyεm ‘to argue’		pyεm ‘to argue’

TR	MID1	SA
neeno ‘to see’	nen-ere ‘to be seen’	nεεɔ ‘to be visible’
caaro ‘to light’	car-ere ‘to be lighted’	caaro ‘to light, shine’

TR	MID2	AN
tɔɔɔɔ ‘to tell the truth’	tɔc-εεε ‘to tell the truth’	tɔɔɔɔ ‘to tell the truth’
pyelo ‘to defecate’	pyel-ere ‘to defecate (by oneself)’	pyelo ‘to defecate’

TR	MID1	MID2	SA
ɲoolo ‘to cut’	ɲol-ere ‘to be cut’	ɲol-ere ‘to cut oneself’	ɲol ‘to be cut’

クマム語においては、ランゴ語よりも動詞統語論における中動相形の果たす機能が大きいことが分かる。

表 16. クマム語とランゴ語における TR: AN/SA 語幹の対応

(53) Kumam		Lango	
TR	AN/SA	TR	AN/SA

kooko ‘to cry for’	AN: kok	kòkkò ‘to cry’	AN: kòk/kòkò/kókò
mòòlò ‘to flow’	SA: mól	móllo	SA: mól
waapò ‘to burn’	SA: wap	wappo	SA: wap
tóorò ‘to break’	SA: tor	tóoro	SA: tor
gaalò ‘to detain’	SA: gal	gallo	SA: gal
tòòpò ‘to rot’	SA: táp	tóppò	SA: táp
oolo ‘to tire’	SA: ool	ollo	SA: ol
pooto ‘to fail’	SA: pooto *	potto	SA: pòtò/pótò
cεεkò ‘to cook well’	SA: cεk	cεkkò	SA: cεk
kweno ‘to cool’	SA: kwei	kweeyo	SA: kwee
òòjò ‘to drop’	SA: òj	òjjo	SA: òj
yεεcò ‘to get crack’	SA: yεc	yεcco	SA: yec
mεεrò ‘to intoxicate’	SA: mεr	mεero	AN: mεr (?)
jwalò ‘to give a birth’	AN: jwal	jwallo	AN: jwal
looro ‘to roll’	SA: lor	looro	SA: lor
goomo ‘to bend’	SA: gom	gommo	SA: gom
jaanò ‘to stretch’	SA: jaɪ	jaayo	SA: ja
ηòòkò ‘to vomit’	AN: ηòk	ηòkkò	AN: ηòk/ηòkò
ceeno ‘to wake up’	SA: cei	cooyo	SA: co

(54) Kumam

Lango

TR	AN/SA	TR	AN/SA
tòò ‘to dry’	SA: tòò *	twòòyò ‘to dry’	SA: twò
nεεnò ‘to see’	SA: neeno	nεnnò	AN: neon SA: nèn
caapò ‘to heal’	SA: caapò *	capjo ‘to heal’	SA: cap
myεlò ‘to dance’	AN: myεlò *	myello	AN: myεl
kòòbò ‘to move residence’	SA: kòòbò * kòbbò		SA: kòbò
lεεgò ‘to pray’	AN: lεεgò *	lεggo	AN: légò

(55) Kumam

Lango

tyeko ‘to finish’	SA: tyek	tyekko	
cwεnò ‘to fat’	SA: cwεɪ		SA: cwe ‘to be fat’
yaacò ‘to get pregnant’	SA: yac		SA: yâc ‘to be pregnant’
gòòjò ‘to untie’	SA: gòj	gòjjo	
ηòòlò ‘to cut’	SA: ηòl	ηòllo	
uumo ‘to cover’	SA: um	wummo	

tɔɔnɔ 'to pour'	SA: tɔn	tɔnnɔ	
dɔɔnɔ 'to enter'	SA: dɔɔnɔ *		SA: dɔ̀nɔ̀
lyero 'to hang'	SA: lyero *	lyeero	
dɔɔtɔ 'to suck'	AN: dɔt	dɔttɔ	
buuto 'to lie down'	SA: buuto *		SA: b̀t̀t̀ 'to sleep'
gwɔkɔ 'to protect'	AN: gwɔk	gwɔkkɔ	

[Infinitive Formation in Kumam: CVC-nɔ → CVCC-ɔ → CVVC-ɔ]

表 16 にクマム語の動詞とランゴ語動詞が *cognate* であると思われる例を集めてみた。多くの場合、TR と SA と AN の形式が一致する。ところが*で示した形式は、クマム語とランゴ語で一致しない。これらの不一致にたいしてどのような説明が可能であろうか。表 16 は、わざわざ TR と SA と AN をもっている動詞を集めたのである。実際はクマム語の動詞は、TR と SA、AN を対にもつ動詞は、多くない。むしろ TR と MID1 あるいは MID2 を対に持つ動詞が多いのである。この事実は、クマム語と他の南ルオ諸語とのあいだになんらかの断絶が存在することをほのめかしている。この断絶が実際に存在するのかは将来の研究をまたなければならない。